『人文学報』第109号（2016年７月）
（京都大学人文科学研究所）

フロイトの冥界めぐり

――『夢解釈』の銘の読解――

上　尾　真　道*

1. 冥界を動かさん

天上の神々を説き伏せられぬのなら，冥界を動かさん *flectere si nequeo superos, acheronta movebo* ――古代ローマの詩人ヴェルギリウスの叙事詩『アエネーイス』のこの一節（第七巻三一二行）は，一八九九年の十一月にドイツ語でわずか六〇〇部だけ出版された書物の銘として採用される。その著者ジグムント・フロイトは，一九〇〇年六月一二日，ベルリンに住む友人ヴィルヘルム・フリースに宛てた手紙のなかで，この本『夢解釈』の成功への期待を少しおどけた調子で語ってみせる――「一八九五年七月二四日，ここでドクター・ジクム・フロイトに夢の秘密が解き明かされり」，こんな記念の碑が，いつか，彼が夢解釈を初めて成し遂げたウィーンの丘の上，ベルヴュー療養所に掲げられる日がくるだろうか，と[1]。この本がその後，どのような名声を得ることになるか，ここで敢えて詳しく述べる必要があるだろうか。ひとつだけ言い添えておくならば，著者の未来予想は実現した。彼の通った療養所こそ姿を消してしまったものの，ウィーンの町を見下ろすその丘の上に文字通りの文面で，精神分析の開始を記念するその碑は確かに据え置かれている。

しかし，後世から見ればいかにも華々しく，成功を約束されたものとして見えるこの始まりの一歩は，当時にしてみれば，それほど磐石な基盤に支えられたものではなかった。むしろ我々は，『夢解釈』の執筆は，ひとつの危機，ひとつの挫折と併せて語られる必要すらあることを思い出さなくてはならない。『夢解釈』の碑は，壮年に達したフロイトの大きな曲折を記念する碑石でもあるのだ。問題の挫折は，一八九一年にウィーンのベルクガッセ一九番地に診療所を構えて以来，フロイトが臨床家として専念してきた神経症についての研究と関わっている。その最初の理論的成果を一八九五年にブロイアーと共著で出版した『ヒステリー研究』で

* うえお　まさみち　立命館大学衣笠総合研究機構

示したその翌年，フロイトは「防衛神経症の心理学および精神療法」についての総括的著作の計画を立てた[2)]。そこでの内容については，一八九六年のあいだに彼が発表しているいくつかの論文（「神経症の遺伝と病因」や「防衛神経症再論」など），さらにフリースに宛てたいくつかの草稿（あの有名な「心理学草稿」を含む）の内容から推し量ることができるだろう。よく知られているように，『ヒステリー研究』から引き継いだくつかの着想（病因としてのトラウマ，カタルシス法による治療）に加えて，フロイトはここでとりわけ，幼児期における性体験を神経症の病因とする説を確立しようと試みている。しかし，これもまたよく知られているように，この説はウィーンの精神医学界からは冷ややかな反応をもって迎えられた（クラフト=エビングのコメント「それは科学的なメルヒェンに聞こえる」[3)]）。フロイト自身，翌年の一八九七年には，自らの学説を支持することの行き詰まりを認め始めている。九七年九月二一日のフリースへの手紙で彼はこう吐露する。「僕は僕の神経症〔理論〕Neurotica をもう信じることはできません」[4)]。そこで挙げられた理由は四つ。実践そのものがうまくいかないこと。幼年期の性体験を病因とする考えにおいては，あまりに多くの父親を倒錯者として断罪せねばならないということ。無意識のうちには現実性指標はなく，真実と情動を備給された虚構とが区別できないこと。深刻な精神病では無意識的記憶がいきわたっていないこと[5)]。かくしてフロイトは，その一年前に予告していたような神経症論の著作の計画を，ついに断念することになるのである。

ところがその一方，この時期のフリースとのやり取りに目を凝らすなら，ちょうどこの挫折とクロスフェードするかのごとくに，フロイトには別のある「予感」の光が差し込んでいたことに気づかされる。一八九七年六月二二日の手紙では，この予感が彼を捉えた際のいささか奇妙な体験がほのめかされている。「ところで僕はなにやら神経症的なものを耐え抜きました。意識には掴みがたい喜劇的な状態でした。うす明かりでの思考，霞のような疑念，かろうじて時折ひとすじの光明が指すのです」[6)]。フロイトのうちには「なにか沸き立つものがある Es gärt in mir」が，八月一四日の時点では，彼はまだ何も片付けることはできていない[7)]。それでもここで確実なことは，この予感とともにフロイトは神経症論から，心理学的なもののほうへと動いているということだ。「心理学にはとても満足している。神経症では重大な疑惑に苦しんでいて，考えるのもまったくいやになっている」[8)]。そしてついに，神経症論によって満たすはずであった野心についてのあきらめを告白した九月二一日の手紙の最後の部分では，夢の心理学についての新たな仕事の展望が示される。「このあらゆる価値の暴落の中で，心理学的なものだけは無垢のままに留まりました。夢は完全に確かな状態にあり，僕のメタ心理学的仕事の出だしはますます評価を上げています。たとえば夢解釈で生活できないというのは残念なことです」[9)]。

この交差は，フロイト自身のそれまでのキャリアについて改めて振り返ってみるなら，いっそう興味深い。学生時代には「哲学と動物学の総合」[10)] をやって学位を取ろうと考えていたフ

ロイトのその後の研究者としての活動は，端的に言って生物学者，動物学者，神経学者のそれである。パリに留学したときも，その後，大学に留まり研究者となる希望をあきらめ個人開業したときすらも，フロイトは決して動物学の追及を手放しはしなかった[11]。だが，彼の科学的野心のいっさいが託されたこの追及は，性と取り組み始めたところで壁にぶつかる。そして，このときにこそ，もうひとりのフロイトが生き生きと活動を始めるのだ。哲学者フロイトと呼ぶべきであろうか。このフロイトは，台頭しつつある哲学的関心に基づいた新たな職業の発明すら予見しかかっている。「夢解釈で生活する」ビジョンは，この時にはまだ存在しないひとつの職業，精神分析家の到来をやがて招くはずである。『夢解釈』の執筆は，こうして動物学者から哲学者のほうへと移り行くフロイトによって為されるのだ。

『夢解釈』の執筆経緯をさらに追っておこう。あの挫折の手紙から年が明けて一八九八年，フロイトははっきりと自分が夢の本の執筆に取り組み始めたことについて語り始めている。二月二三日には夢の本のいくつかの章はすでに出来上がっていた。「この本はたいしたものになるだろう。思っていた以上に僕を深く心理学のなかへと導いていく。新たな手がかりは全て，哲学的な終端にあります。器質的―性的な終端まで来たものはまったく何もありません」[12]。さらに一年が経過し，九九年五月には「夢〔の本〕は出来上がるだろう」という確信をフロイトは得るようになっており[13]，その夏にはできあがった章から順次，印刷が開始されている。

さて，この本の銘を決める仕事が残っている。フリースとの書簡によれば，少なくともそれは九九年七月一七日まで決まっていなかった。ゲーテから取られたひとつの候補を予めフリースに却下されていたフロイトは，この日の手紙で，本全体の銘がまだ見つからないと述べている。一方で，やがて銘として採用されるはずのものは，このとき，本の一部に相当する「抑圧」の章の暗示として提示されている[14]。それは以前に計画していた神経学の本では「症状形成」の章のために用意されていたものであった[15]。すなわち，「天上の神々を説き伏せられぬのなら，冥界を動かさん」―― 最終的に夢の本全体の銘に選ばれるこの文は，これからその由来に遡って確認するように，挫折と新たな始まりの両方を示唆するのにうってつけであろう。

ヴェルギリウスの『アエネーイス』に登場するこの文は，ローマ建国の英雄アエネーアースを妨害しようと努めた女神ユノーが，自らの計画のことごとくの失敗を恨みつつ，アエネーアースを呪って吐くものである。だが，ここで，なかでもひときわ重要な策謀として思い出されるのは，カルタゴへと漂着したアエネーアースをそこに留まらせようとして，ユノーがウェヌスを巻き込みたくらんだ，カルタゴ王女ディドーとの結婚である。この策は一度は功を奏し二人は契る。だが，アエネーアースはローマ建国の使命を思い出し，ディドーを棄ててカルタゴの港を離れる。ディドーはアエネーアースの残した剣で自死する。天上の神々を説き伏せ，正攻法でアエネーアースをカルタゴに留まらせることができなかったユノーは，こうして冥界に頼ると宣言するのだ。ユノーが動かす冥界とは，いわば棄てられた花嫁の復讐であり，かく

して復讐の女神アーレークトーによって戦乱が呼び起こされる[16]。

『夢解釈』の銘の元の文脈をこのように改めて参照するなら，古代地中海を舞台とした叙事詩の世界と，一九世紀末のウィーンの神経医学とフロイトとの関係とのあいだに，ひとつの照応が閃く。それを繋ぐのは，婚姻の破綻というモチーフだ。先に言及した神経症論の挫折をフロイト自身が嘆く，一八九七年九月二一日の手紙を見てみよう。そこでフロイトは，死後の不滅の名声やその他もろもろの期待を確かなものとするはずであったヒステリー研究の行き詰まりを認めた後，ユダヤの小咄を引き合いに出すことによって，自分がどのような立場にあるか示唆している。

> だって僕が不満に感じていたってよかったでしょうよ。死後の不滅の名声への期待はそれほど素晴らしかったのです。それに確実な富の期待，完全な独立，旅行，そして僕から青春を奪ったひどい心配事などいらぬくらい子どもたちを立派にすること。これは全部，ヒステリーが分かるようになるかどうかにかかっていたんです。さてもう一度，静かで控えめな僕に戻ることもできます。気配りをし，自分を抑えることができます。すると僕が集めたコレクションのなかから，こんな小話が浮かんできます。レベッカや，ドレスを脱ぎなさい，お前はもう花嫁 Kalle ではないんだよ[17]。

こうした連想をフロイトが吐露していることは，普通であれば大した問題にはならないところだ。しかし精神分析の古典的な原則に則り，まさにこのささやかな点にこそ，フロイトがこの時自らをどのようなものとして眺めたか，その核心に触れる点が表現されている，と考えることもできるだろう。すなわち，神経症論の挫折のためフロイトは今一度，静かで控えめな自分へと戻らねばならないのだが，それはちょうど，来るべき婚姻の約束が破談となってしまった花嫁のように，なのだ。ここでフロイトは奇しくも，ディドーの悲嘆を分かち合う立場に自らをなぞらえているのである。であるならば，ここで我々は，破談とそれへの復讐というテーマのうちに，まさしくその代償のようにして執筆された『夢解釈』を位置付けてみなくてはならないだろう。

するとそのとき，『夢解釈』の本文中にこの同じユノーのセリフが再登場する際の文脈の含みが，改めて際立ってくるように思われる。その箇所とは，『夢解釈』の最終章「夢過程の心理学」のＥ節，「第一次および第二次過程 —— 抑圧」であるが，これはまさしく，フロイトがそれまで『夢解釈』のそこかしこで示唆してきた「夢の心理学」と「神経症の精神病理学」の接続を，なんとか確立させようと試みている節である。ただし，この接続は容易に遂行されはしない。そこでの議論の進みはいささか複雑ではあるが，なるべく簡潔に辿りなおしておきたい。

まずフロイトが確認するように，夢の心理学は神経症論から着想されたことに拠っている。すなわち神経症論から着想されたこととは，「意識の関与なしにもきわめて複雑な心的性能が可能である」[18] ことである。ただし，この段階ではまだ，単に意識の注意をもはやあてがわれなくなった思考の歩み，すなわち「完全にコレクトな」[19] 前意識的歩みが問題であるに過ぎない。このコレクトな歩みが夢形成に寄与するためには，これが前意識的なエネルギーの備給から離れ，無意識的願望により備給を受ける必要がある。さて，まさにそのとき夢の心理は，正常な過程を離れ，「精神病理形成物」[20] を抱え込むことになる。中間的圧縮，妥協形成，表面連想，矛盾隠蔽[21]。これらのインコレクトな思考の支配，いわゆる「一次過程」の発見において，夢の心理学は神経症の病理学の側から基礎付けられることとなるのである。

ではこの基礎付け自体の根拠はいかなる点に求められるだろうか。予想するのはたやすいだろう。「正常な思考系列がこのように異常な心的加工を受けるのは，この思考系列が無意識的願望，すなわち幼児的なものに根をもち，抑圧のうちにあった無意識的願望の転移となっている場合に限る」[22]。このように，フロイトはやはり，異常（神経症）と正常（夢の心理学）の接点を幼年期に定めようとするのだ。だが無論そのことは再びフロイトを同じ挫折へと誘うに違いない。実際フロイトは，幼年期の性的な願望感情が神経症症状形成の駆動力であるという発見の「例を見ない確実さ」を主張してみせながらも，これを夢の心理学にも適用すべきかどうかは未決定にとどめ，それゆえ彼の理論を未完成なままにすると述べるのだ[23]。このことはフロイトが本書の執筆の途中まで，最終章を「夢と神経症」という題で準備していたことを考えれば示唆的であろう[24]。フロイトの歩みは，この二つの本質的な接続を打ち立てるには，もう一歩のところで及ばない。彼は，出版された『夢解釈』のうちに，ついに彼の神経症論を十分に含みいれることはできなかったのだ。

しかしそれでもなお，「コレクト」な前意識的思考系列を異常な仕方で加工するプロセスの発見のうちに，夢形成とヒステリーの症状形成とのあいだの「最大の類似（アナロギー）」[25] を認めることで，フロイトは，精神医学の言説のうちで実を結ばなかった彼の神経症論の仇を思いがけない形で取る。そこでは一種の転倒がなされる。フロイトによれば，夢はいかなる病理現象でもない。いかなる障害をも含まず，心的装置の正常な構成の一部としての無意識的思考活動によって生み出されるものである。だとすれば神経症もまた，そうした正常な構成のうちで生じるものと考えなければならない。この「異常な過程」とは，正常な構成の一部である。フロイトがこのように論じる折も折，例のユノーのセリフは，本文中に雷鳴の響くごとく唐突に再登場して，テクストを文字通り真っ二つに切り裂くのである。例の一文が登場する前後の部分をそのまま引用しておこう。

夢が我々に証明するとおり，押さえ込まれたもの Unterdrückt は普通の人間においても

存続し，心的性能を発揮することのできる状態に留まっている。夢は，この押さえ込まれたものの表現のひとつですらある。……心的に押さえ込まれたものは，覚醒生活では矛盾の対立処理により，浮上 Ausdruck を妨げられ，内的知覚から遮断される。夜間の生活では，妥協形成の支配のもとに，意識に上る sich aufdrängen 手段と道を見出すのである。

天上の神々を説き伏せられぬのであれば，冥界を動かさん。

夢の分析を追いかけることによって，我々はこのとびきり驚くべき，とびきり謎めいた器具の組み立てについての洞察をある程度得た。もちろん，わずかな程度に過ぎない。しかし，それにより，別の ―― 病理的と呼ぶべき ―― 形成物から，その分解へと進むための端緒が開かれた。なぜなら病 ―― 少なくとも正当に機能的と呼ばれる病 ―― は，この装置の粉砕，新たな分裂の製造を，その内部における前提条件としているのではない。病は力動的に，諸力の働きの構成要素の強まりや弱まりを通じて，解明されるべきである。その力の働きについては，非常に多くの作用が正常機能の間には覆い隠されている[26]。

『アエネーイス』に由来する例の一文が，ここで蝶番として働く際に果たす二重の役割を確認しておこう。第一に，この文が登場する前の部分で展開された理論内容との関係において，冥界とは，「押さえ込まれたもの」への示唆であり，人間一般の心理過程として想定された理論的構築物に対応している。「浮上を妨げられた」「押さえ込まれたもの」が，夜のあいだに「上って」くるというのだ。この意味で，問題の一文とは，なにより心理学の理論のうちに場を与えられた「地下世界」の存在を暗示している。九九年七月に考えられていたような「症状形成」あるいは「抑圧」の示唆としての働きを引き継いでいると考えていいだろう。

しかし突然の引用がテクストの流れを断ち切った後では，ユノーのセリフは，今度はそれが執筆された文脈を背景とする，もうひとつのアレゴリーとして聞き取ることが可能である。つまりフロイトの夢理論それ自体が引き起こす動揺あるいは認識論的な切断のためのスローガンとして，それを読むことができるのだ。そこにおいてフロイトは，まさしく自分の理論的構築物を受け入れることによって可能となる，精神病理学上の認識の転換を説明している。病理的なものとは，正常なものが壊れてしまうことや，あるいは切り離されてしまうことによって理解されるのではない。病理的なものが姿をとるようになるのは，さまざまな力が機能する際の強弱の配置としてであり，言わば，力の抑揚，濃淡が描かれるタブローの上でのことだ。病とは，欠如や欠損ではなく，葛藤の形態なのだ。この展望のうちでは，病は，正常なものと同じ平面のうちに置かれることになる。こうしてフロイトは，当時の精神医学の主流の見方，病理を正常性の欠損や破壊に回付し，何ならば慎重に正常なものから遠ざけておこうとする分断の思想に対して異をつきつけるのである[27]。さらに，この異論は今度は翻って，正常なものの規定を改めることになろう。今や正常なものもまた，諸力の構成要素の駆け引き，対立，葛藤，

争い，そして妥協にもとづく力動性によって理解されねばならない。ユノーのセリフはこうして『夢解釈』全体の意義への暗示を引き受ける。それはまさしく，正常なものをも巻き込むひとつの葛藤状態，対立状態を顕現させることである。「葛藤」あるいは「紛争」，「諍い」という常態 —— それこそが，「冥界を動かす」と言う言葉が二〇世紀のはじめに呼び込む視点なのだ[28]。

大いなる分断に代えてあまねく広がる葛藤を。それは科学者フロイトの理論的整合性の帰結というよりも，哲学者フロイトによるある種の実践的介入と言ってもよいだろう。まさしくこの介入とともに精神分析は始まった，おそらく医学と少し異なるものとして。その思想的な射程を確認するために，我々はこの葛藤のありかたを，もう少し細かく検討していくことにしよう。

2. 力としての抑圧

前節の帰結を引き受けて，フロイトに特徴的な「力動論」とは，葛藤を常態として基礎付けるものである，と言えるだろう。しかしこのようなことは既に古典的フロイト理論の「常識的理解」の範疇ではないか。つまり誰しもこんな風に当たり前のように理解しているのではないか。しばしば性欲動に由来する葛藤によりある表象が意識よりも下に押さえつけられ，すなわち「抑圧」され，そこから回帰したものが症状となって現れる，といった具合に[29]。

ここで我々が強調したい点を明らかにするために，フロイトにおける葛藤の形態論にとっては，二つの軸の区別が必要であることを述べておきたい。ひとつは垂直性の軸であり，もうひとつは，ここで表面性の軸と呼ぼうとするものである。上下に引き裂かれた大なる〈葛藤〉の軸と，いくつもの部分的な諸葛藤の軸の区別と言ってもよい。だが，なによりこの区別が問題になるのは，いまだしばしば大きな誤解のうちにあると思われる，ひとつの重要概念の理解をめぐってである。つまり「抑圧」概念である。

「抑圧」という概念が，各国語への翻訳において，しかしそもそもそれ以前にフロイト自身においても混乱のなかに叩き込まれている様子をまず確認したい。というのもしばしば指摘されることだが，『夢解釈』においてこの概念は明らかに二重化しているからだ。すなわち「抑圧 verdrängen」と「押さえ込み unterdrücken」の二つの用語によって。一見すると『夢解釈』では，「抑圧」と「押さえ込み」は，ほとんど同じ扱いを受けているようにも見える。たとえば，初版一一一頁では，彼の夢理論の中核をなす重要な命題が次のように述べられる。「夢は（押さえ込まれ，抑圧された）ある願望の（偽装された）充足である」[30]。

しかし，一方でフロイトは，ひとつの脚注をつうじて，この両者の微妙な差異についても示唆している。「たとえば，「押さえ込まれたもの」という言葉に，「抑圧されたもの」と言うと

きとは異なる意味を与えているかどうかについて，私は報告するのを避けた。ただし，後者のほうが前者よりも強く，無意識への所属性に重きが置かれていることは明らかになっているのではないだろうか。」[31]。この曖昧な差異をどのように理解すればよいだろうか。たとえばラプランシュとポンタリスは，有名な語彙集のなかで，上記の注に依拠しながら「押さえ込み」を「意識的メカニズム」とし，「押さえ込まれる内容はただ前意識的になるだけで無意識的にはならない」としている[32]。ただし，これは，フロイトが後年になって整理をすすめた無意識論，抑圧論を踏まえての遡及的な理解であり，『夢解釈』におけるこの語の機微を直接扱ってはいないことに注意しておかねばならない。

我々としては素朴に，はじめてフロイトを読むかのように進めていきたい。そこでまずは，ドイツ語の語義そのものに立ち止まることとしよう。「抑圧」と通例訳される verdrängen は，drängen という動詞に，ver という接頭辞がついたものである。Drängen とは「押す」こと，「押しやる」ことであり，排除を示す ver との組み合わせからして，verdrängen は「押しのける」と訳すことができるだろう[33]。一方で unterdrücken を見れば，drücken もまた「押す」，「押さえる」であるが，ここには「下へ」という方向性を示す接頭辞 unter が付されていることこそ特徴的である。「押さえ込み」と訳してきた unterdrücken はしたがって正確に述べれば，「下へ押さえつけること」である。ひるがえって見れば「抑圧」においては，そもそもこの「下へ」という垂直的な作用のニュアンスは，言葉そのものには存在しないことにも気づかれる。

この点からさらに翻って「抑圧」概念の成立を見直してみることができるだろう。そこで，導入の時点にさかのぼって「抑圧」概念の元の姿を確認することとしてみたい。むろん知られているように，「抑圧」という考えをフロイトが導入するのは，『夢解釈』よりもずっと早い時期，彼がヒステリーの研究に専念していたときである。問題は，フロイトが「防衛神経症」と名づけた，神経症についての新たな理解であった。だがそこで何が賭けられているのか掴むためには，フロイトがブロイアーとともに取り組んだヒステリーについての研究における，いくつかの微妙な展開を，当時の異常心理学一般との関係のもとで確認する必要がある。

フロイトが「防衛」を神経症のメカニズムの要に据えていく過程をここで追っていこう。一八九三年，ブロイアーとともにフロイトは「ヒステリー現象の心的メカニズムについて」という暫定報告を神経学中央誌に発表する（以下，「暫定報告」と略す）[34]。この報告の新しさは何よりまず，「外傷神経症」という特殊な病理カテゴリーだけに流通していた出来事と症状の間の因果性を，ヒステリー全般に拡大することであった。ここで当時の議論の背景を簡単に抑えておこう。「外傷神経症」とは，ベルリンの精神科医オッペンハイムが一八八四年に発表した疾患単位である。ここで問題となるのは，鉄道事故，工場事故に巻き込まれた後に機能障害を示す一群の患者たちであり，オッペンハイムはこれを，神経に加わったダメージの帰結として紹

介したのだった。彼はこの研究を一八八九年に著作にまとめて発表することになるが[35]，それ以前の議論の過程で，パリの高名な神経学者ジャン=マリー・シャルコーと書簡のやり取りを行っている。パリでは同じ機能障害についてこれをヒステリーの一種とみなし，「心的外傷」，つまり器質的にはいかなる傷もないが情動ショックに伴って遺伝的な瑕疵があらわになったものと考えた。フロイトは，このような議論が盛んなパリへと留学し，まさしくこの主題を携えてウィーンに帰還していたのである[36]。

フロイトとブロイアーは，この「心的外傷」という条件を，それ自体では事故に巻き込まれていないヒステリー一般に拡大するのである。さて，ここでまず注目しなければならないのは，「暫定報告」において彼らは外傷が病因として働くための条件を二つ示しているという点である。ある出来事が病因的な外傷となるためには，第一に，通常であれば特定の反応（泣き叫ぶなど）により放出される情動が，反応の不在のために除去されていないことが必要である。第二に，そうした情動アクセントを備えた表象は，通常，別の表象との連合関係に入ることで修正され（たとえば，事故の表象の後に，救助の表象が続く場合），その情動アクセントを摩滅させていくが，そうしたことが起こっていないことである。この二つの条件が満たされるときに，ある出来事は心的外傷となって留まり続け，症状のうちで直接的に作用することとなる。「こう言ってよいだろう。病原となった表象が鮮明なまま情動力を携えているのは，通常なら除反応および，妨げられない連想の状態での再生産とによって摩滅するところが，こうした表象では上手くいっていないためである」[37]。

したがって，「原因が止めば効果も止む」という原理に基づく彼らの治療法は，当然，上記の二つの条件の解除ということになる。つまり，「〔この精神療法の方法〕は，もともと除反応されなかった表象の作用を廃止するために，挟みつけられた問題の情動を，語りにより放出してやる。さらにこの方法は，その表象を（軽い催眠のもと）正常意識に引き込むか，ないしは，健忘を伴う夢遊状態で起こるように，医者の暗示を通じて廃止するかして，この表象を連想による修正にかけるのである」[38]。

しかし一八九五年に二人が再び共同で彼らの研究を一冊の著作『ヒステリー研究』にまとめるとき，我々の目を引くのは，フロイトのヒステリー理論が，既に一八九三年の共著のそれからずれ始めているということである。とはいえカタルシス法自体になんらかの修正が加えられたわけではない。すなわち第一の条件，反応による情動の除去に関する仮説は，未だフロイトの病因論，治療論のうちでも維持されている。問題は，第二の条件，表象の意識化の不具合をめぐる仮説と関わっている。

この第二の条件について「暫定報告」に戻って確認しておけば，そこにはさらに二つの可能性が準備されていた。ひとつは，外傷となる出来事それ自体の痛ましい特徴のために，意識的表象の連鎖から自我が出来事を排斥しようとする，というものである（別の箇所の表現を用いて

「外傷力」[39] の系と呼べよう)。他方,「暫定報告」でより大きな関心がおかれていたのは，もう一つの考え方であった。すなわち当時，二重意識と呼ばれており，特にブロイアーが「類催眠状態」と呼ぶような，正常な意識と分裂した特殊な意識状態が，ヒステリーという病理の素因として既に出来事を待ち構えていたとするものである。この意識状態の解離は二つの異なる表象連鎖の系列を生み出す。意識的で正常な記憶の連鎖と，異常で病理的な表象の連鎖である。「暫定報告」では，この二つの間に交流がないこと，しかし，病理的連想の系列に限れば互いの表象間の連想が可能であることが主張されていた。そして，こうした前提のもとに，催眠下での暗示を通じた表象の修正，という治療法が基礎付けられていたのである[40]。

すなわち外傷そのものがなんらかの力を発揮するのか。それとも意識から分断された別の意識領域が存在するのか。ブロイアーとの共著においては，後者に重要性が与えられていたのだが,『ヒステリー研究』第四章でのフロイトは，その線をもはや維持していない。彼は今や，解離による意識の分断のかわりに，同一の表象系列の内側で働く外傷力，そしてその別の現れとしての，抵抗，防衛，抑圧を評価しようとする方向性に優位を与えるのだ。この舵きりは，まず，フロイトが催眠をそれほど信用していなかった（あるいは単に催眠が苦手だった）ということからやってくる。それに代えてフロイトが主張したことは，病理的連想にたどり着くために，わざわざ夢遊と催眠の異世界へと降りていく必要はなく,「やはり確実に存在する病原的表象系列を，単に押すだけで durch blosses Drängen 現れさせることができる」[41] というものであった。かくしてフロイトは，分断ではなく，外傷の「力」という問いを検討する道を開くのだ。力が病理の発生にきっかけを与え，また同じ力が，その治療において力により克服されねばならない。すなわち「私は私の心的作業をつうじて，患者における心的力を克服しなければならない。すなわち病原的表象の意識化（想起）に抗う心的力を」[42]。

この新たな転回の意義をしっかりと把握せねばならない。まずなによりここには「分断」の病理学からの切断が認められる[43]。二つの世界が区別されるのではないという点にこそ,「下意識」[44] について論じるほかの医学者たちとは異なる，フロイト思想の固有性を見出さねばならない。「暫定報告」で「異物」と呼ばれたような病の核は，いまや，正常な意識とはまったく別物として隔離できるものではないとわかる。「我々の病原的心的グループはこれに対し，自我からきれいに抽出されはしない。外部の層は多方面において正常な自我の持ち分のうちに移っており，病原的組織と同じように本来的にこの自我の一部となっている。両者の境界は分析においては純粋に協定上に過ぎず，あるときはここ，あるときはそこにつっこまれており，唯一の場に定められることはほとんどない」[45]。したがって，いまや摘出手術のように，異物を取り除くことが問題なのではない。「浸潤」のように働く，抵抗の力に働きかけることが，治療となる。「病原組織は本来，異物のようにふるまうのではなく，むしろ浸潤のようにふるまう。この比喩でいけば，浸潤として抵抗のことが考えられねばならない。療法は摘出のよう

なことではない —— 今日の精神療法には不可能なことである。そうではなく，抵抗を和らげ，そうしてそれまで封鎖されていた領域への道を開き往来を促すことにある」[46]。

さて，以上のような認識論的構えのうちに「抑圧」概念を置きなおすことが必要であろう。つまり「抑圧」とは，表象の二つの本性を区別するための，あるいは二つの世界の隔たりを語るための概念ではない。むしろ，あるひとつの連続する領域のなかにいきわたる力の伝播，浸透作用，拡張について語るための概念である。そこでは正常と異常の境界は，協定上，定められたものでしかない。ならば局所論はどうしてそこで不定形なものとならないだろうか。『ヒステリー研究』でのフロイトが提示するのは，共著者ブロイアーの見解とも対立するこの新たなパラダイムである。ひとつのフィールド上を駆け巡り，道を封鎖し，表象を不可視化・無意識化する力のパラダイムだ。別の言い方をするならば，無意識とは決して実在として指し示されるのではない。むしろ常に「無意識的 unbewusst」という形容詞のかたちで，その生成の地点において注目されることが必要なものである。フロイトの「抑圧」理論とは，このような無意識化の力の場をめぐる理論なのである。

さて「抑圧」概念のこうした前提を確認することにより，我々は，フロイトが冥界とともに呼び出した力動論の，より詳細な構成を論じていくことができるだろう。次節では『夢解釈』に戻り，フロイトが，「道を開き往来を促す」仕草を確認することとしたい。

3. 『夢解釈』の歩み

「押しのける」，あるいは「つき入る」。このように，力づくで道から下ろされたり，あるいは道を開いたりといった語彙によって，フロイトの力動論は特徴づけられる。しかし，力の「形容詞」的介入と，場所としてのその実体化とのあいだには，常にゆらぎがある。たしかに「冥界」とは，伝承で絶えず示されてきたとおり，地下という場所性と不可分である。ここでは表面をかけめぐる力と，下方に匿われた空間とは，気をつけていなければ，すぐさま入れ替わってしまう。

それでも我々はこの二つの隔たりを開いておくことに注意を払わなければならない。それはたとえば，フロイトが次のような勧告を我々に向けているからでもある。『夢解釈』の第七章 f 節「無意識と意識 —— 現実性」という節では，このように言われているのだ。

> 前意識的思考が抑圧され，無意識によって受け取られるというなら，この，土地をめぐる戦いの表象領分から借用されたイメージは，我々を以下のような仮定へといざなうだろう。実際に，一方の精神局所性においてある配列が解消され，別の局所性におけるある新たな配列によって代理されるという仮定だ。この喩えに対して，我々は，現実の実情にいっそう合

致するように見えるものを採用する。すなわち，あるエネルギー備給が，ある特定の配列に移される verlegen，あるいはある特定の配列から引き戻される zurückziehen，その結果，精神的構築物があるインスタンスの支配の下に巻き込まれるか，あるいはそれから取り去られる。我々はここで，またしても，ある場所的表象様式を，ある力動的表象様式で取り替えるのだ。精神的構築物が可動的なものとして我々に見えるのではなく，その神経支配（インネルバチオン）が可動的なのである[47]。

ここで述べられるのは，局所論を額面どおりに受け取るわけにいかないということである。事実，フロイトは多くの箇所で，局所的記述そのものがひとつの比喩に過ぎないということに注意を向けている。たとえば『夢解釈』のうちでフロイトが心的局在性の概念と心的装置のシェーマを導入する際の，非常に慎重な言い回しを見よ（「厳密に言えば，心的システムの実際の空間的配置を仮定する必要はない」）[48]。あるいはもっと後に述べられているように，「「前」と「後」，「表面」と「深層」といった空間的関連付けは，我々にとっては差し当たり，諸機能の規則的な継起を記述するという意味のみを持つのです」[49]。

であるならばフロイトによる局所論的描写にいったん距離を置き，その力動論的側面を真面目に受け取りながら，『夢解釈』を読み直してみる必要があるのではないだろうか。それにより，フロイトにおける「深層」という場所性を，表面における力の分配のモデルとして読み直すことができないだろうか。

ここではまずその準備として，「深層心理学」という呼び名を吟味することから始めてみたい。一般に，精神分析を深層心理学と呼びかえることは，フロイトの時代からなされてきた。しかし，そもそもこの名称が，フロイト自身によるものではないことは知られている。一九一一年にオイゲン・ブロイラーがフロイト理論を紹介する著作のうちで使用したこの呼び名について，フロイト自身は，ある箇所ではやや距離を置いて「頂戴した」ものだと断っている[50]。さらに，フロイトがそのほかの箇所でこの語を使用するのは，精神分析を外に向けて紹介しようとする文脈においてであることが専らである[51]。したがって「深層心理学」とは，フロイトにとってはいくらか留保のある表現であったと言えそうである。

さらにその際にも，フロイトはこれを，単なる心理学の一分野として位置づけているのではない。深層心理学の導入はむしろ不穏な切断として強調される。深層心理学をもし導入するなら，「正常心理学をこの新しい洞察と調和させるには，根底を覆すほどの手直しが正常心理学に必要となるだろう」[52]。もし我々が，深層心理学を，心理学の光によって深層を解明するものとみなすのであれば，こうした注意を与えるには及ぶまい。そのとき「深層」とは，単に探検家のまなざしによって明るみにだされる地下世界に過ぎないものとなろう[53]。しかし実際のところ，フロイトが強調しているのは，まったく別の事柄ではないだろうか。「深層」には，

それを探ることそのものが開く，何らかの転覆的側面が備わっているのではないか。

ここでさらに考察を進めるための手がかりとして，フロイトのあるテクストの一節に目を向けてみたい。それは，ユング，アドラー，シュテーケルといった，極めて近しいところにいたひとびと，いわば「深層心理学」という枠のなかで交じり合っていたひとびとに対して向けられた決別のテクストである。その末尾の一節は，まさしく彼らをわかつ「運動」の差異を示している。

> 人間は，強い理念の支持者でいるあいだは強くとも，それに反抗するなら無力となる。精神分析はこの喪失に耐えるだろう。この支持者の代わりにべつの支持者を得るだろう。私はただ以下のような願望を述べて締めくくりたい。精神分析という冥界への滞在が居心地悪くなったひとびとすべてに，運命が，どうぞ快適な天上への旅を贈ってくれますよう。残りの者たちには，どうか深みのうちでその仕事を邪魔されることなくやりとおすことが許されますよう[54]。

ここではまさしく二つの「場所」というよりは，二つの「運動」が問題となっている。一方は，天上へ上るものたちである。他方は，冥界に滞在し仕事をするものたちである。精神分析それ自体が冥界なのであり，精神分析運動とはこの冥界の運動，すなわち深みに止まること，滞在すること，そこで仕事をすることである。精神分析の仕事とは下ることでも，昇ることでもない。本質的な区別は，天上への垂直的飛翔と冥界における滞在のそれである。さらに強調すべきは，滞在とは決して飛翔の量的な反対物ではない，ということである。すなわち冥界への滞在そのものが，まさしく天上への飛翔に含まれる垂直性を批判し，解消する契機とならねばならない。重要なのはまさしく「飛んでいけない」ということであり，したがって，「足をひきずって」地表をなぞる運動をいかに捉えるか，ということなのだ。

かくして，我々はフロイトの「深層」を捉える二つの見方を手にすることとなる。一方でそれは，垂直的な運動のなかで確認されるような下部である。しかし他方でそれは，そうした垂直性の解消の契機としての地表の設立と関連している。ここでは「深み」は「表面」と，ちょうど『ヒステリー研究』でフロイトが「力」のモデルを通じて示したように，連続的につながっている。「表面」をなぞること，これが精神分析の仕事を特徴付ける。一九一四年にフロイトが技法論を要約した際の言葉を確認するだけでよいだろう。「ついに一貫した現在の技法が出来上がった。この技法では，医者はある要因や問題に照準を合わせることをやめ，被分析者のその都度の心的表面を研究することに甘んじている」[55]。

さて問題は，精神分析を特徴づけるこのような表面の調査が，同時に，深みへ我々を導くような特殊な「歩み」のあり方であることを明らかにすることである。ここで『夢解釈』に戻る

ことにしよう。すると，スタロバンスキも指摘しているように[56]，まずなにより『夢解釈』という本そのものが，フロイトによって「歩み」として提示されているという事実が，我々の注意を引く。フロイトが，まるで，彼お気に入りのキノコの茂ったアウスーゼの森を歩むかのように，『夢解釈』の構成を語っていることを思い出そう。

> さて全体はこうして散歩空想に当てはめられます。初めに，（木々を見ることの無い）著者たちの暗い森があります。行く先も見えず，迷い道だらけの森です。それからひとつの隠れた切り通し Hohlweg があって，その道を辿って僕は読者を連れていくのです。風変わりさ，細かい話，思い切った告白，しょうもない洒落なんかと一緒に僕の夢の見本が提示されるのです。それから続いて突然，高みに出て，見晴らしが得られます。そこでこう聞かれるのです，さあ，あなたはこれからどこへと行きたいのですかと[57]。

木々を見ない著者たち（つまり第一章で取り上げられる夢に関する文献の著者たち）は，あの諺どおりで行けば，森ばかり見ているひとびとである。天空から夢を一挙に俯瞰して，細部への注目をないがしろにするひとびとである。他方フロイトの注意深い洞察とともに，『夢解釈』は，読者を「願望」という見晴らしの丘にまで導くというわけだ。だが，ここでの語りは，『夢解釈』の後半，つまり「夢の心理学」へといかに至るかまでは扱っていない。実際，フロイトがそこでさらに歩みを進めるならば，この散歩はまったくの冥界くだりの様相を呈することとなる。「ここまで，我々が歩んできた道はすべて，私がそれほど迷ったのでなければ，光のうちへ，解明そしてまったき理解へと通じていた。しかし我々が夢における心の過程により深くはいってゆこうとする瞬間から，すべての小道 Pfade は暗闇のうちになだれこむ」[58]。というのも，夢はいまや，既知の事実から解明されることはできず，いくつかの仮定と推測によって検証されることしかできないからだ。

ここでフロイトは，この暗闇を進む方法論について，あらかじめ，それがある種の行き止まりに達することを断っている。「我々が，夢過程の分析から手に入れた心理学的仮説は，いわば停留所で待っていなければならない。他のさまざまな攻撃地点から，例の問題の核心へむけて突き進んでいこうとする他の調査の帰結との連絡を，この仮説が見出すまで」[59]。興味深いのは，こうした研究遂行上のフロイトのスタイルは，まさしくフロイトの夢解釈のやり方，さらには臨床の進め方とパラレルであるという点である。ひとつの要素の系列を自由連想のしかたで流れのままに辿る。それから続いて，それとはまた別の，しかし隣り合う系列に移り，そこで同じ作業を反復する[60]。フロイトの夢解釈の方法は，この「取り留めなくはなしがとぶこと（百番目から千番目に飛ぶこと）vom Hundertsten ins Tausendste geraten」の果てに，ひとつの期待，夢の発生源たる夢思想へと行き着くだろうとする期待を想定するのだ[61]。こうした攻

略作戦において，出発点，「攻撃地点」はあらかじめ複数的だ。暗闇へわけいる散歩は，常に別の道取りをほのめかし，あまつさえ要請しさえする。すなわち，フロイトが述べるように，いつでも「多重解釈 Ueberdeutung」[62] の余地が残されている。さて，この暗い森の入り口で予告されたこうした複数性，多重性は，その核心の付近においては，キノコの本性として示されるだろう。

> もっともよく解釈された夢においても一部を暗闇のまま残さねばならないことがしばしばある。というのも，解釈において以下の点に気づくからである。夢思想のある結び玉が，あるところで現れるの anheben だが，この結び玉は解きほぐされないだろう。しかし，夢内容に対しても，さらなる貢献をもたらさないのである。これはそのとき夢のへそであり，夢はこの場所で，未知のもののうえに坐している。解釈において行き着く夢思想は，一般的には結末なしに留まらざるをえず，我々の思想世界の網状の絡まり netzartig Verstrickung のうちで，あらゆる方向に向けて流れ出る auslaufen。この網状体 Geflecht のよりうっそうとした場所から，そのとき夢願望は，菌糸体からキノコが飛び出るように，飛び出ているのである[63]。

この有名な一節が示すのは，暗闇のほうへ向かう歩みがひとつの核心（へそ）へと近づく際の風景である。核心の「未知のもの」のうえに座す網状の絡まりがあって，そこからあらゆる方向に向けて思想の網状体（あるいはフロイトはきっと神経叢を念頭に置いていたはずだ）が広がる。夢というこの網状組織を前にして，フロイトは最初から，それを「全て」として明らかにすることに全面的な重要性を与えていないことにも注意せねばならない。つねに別の解釈の可能性によって，解釈は開かれたままに留まる。夢解釈が「寸断されて」[64] 行なわれることさえあってよい。このようにしてフロイトが提示している夢解釈は，まさしく「結末なし」の，終りなきものであるように思われる。ここには既に，フロイトが晩年，去勢コンプレクスの「岩盤」として見ることとなるのと同じ行き詰まりが，記述されているのだろうか[65]。我々はここでひとつの点にだけ注意しておこう。それは，この一節で示される「結末なし」が，夢思想の網目の外部に放擲された不可能性の相関項ではない，ということである。そうではなく，むしろ，この「結末なし」は，流れの密集の実在と，それが開く多方向性を示している[66]。そこにおいて我々は，夢が絶えず別の角度から語られ，書き直され，反復されるような，ひとつの罠，ラウンドアバウトに入り込むのだ。少なくとも『夢解釈』は，こうした多重性そのものを，そのままの形で，つまりいかなる超越論的外部とも関係付けることなく，提示していると思われる。

冥界の歩みは，まさしくその第一の様相においては，こうしたなまの多重性として受け取られねばならないだろう。すなわち，中心的な絡まりを軸に配列から別の配列への跳躍的移動を

繰り返すような，転移と反復の論理である。垂直的な飛翔と下降が解消されるところで，深層の歩行者フロイトの仕事は，このような中断と再開のリズムを通じて構成されるのだ。

4. 迷宮と地層

続いて，このようなフロイトの特殊な歩みを，彼のメタ心理学の理論と照らし合わせながら，そこで力の問いがどのように考えられるか，見てみることにしよう。そのために，ここで我々は『ヒステリー研究』における「配列」の描写を確認しておきたい。とりわけ彼が心的配置の第三のもの，すなわち「多重決定」と名づけるものは，我々が上の節で確認した歩みと，その性質において近しいものと考えられる。少し長めではあるが，フロイトの記述を引用しておこう。

> ここでさらに，第三の配列に言及せねばならない。もっとも本質的な配列であり，これについて一般命題を作り出すことは難儀である。これは，思考内容に従う配列であり，核にまで届く論理的糸による結ぼれ Verknupfung である。この糸は，個々に特殊で，不規則で，何重にも屈曲した道に相当するだろう。この配列は，力動的特徴を持っており，先に述べた二つの層のもつ形態学的特徴 morphologische と対立的である。後者ふたつの層は，空間的な説明図式のうちで，堅い弓状線および直線によって記述されるべきものである。しかし他方，論理的連鎖の歩みを追う際には，小さな棒を持ってせねばならない。この棒は，きわめてもつれあった道のうえで，表層から深層へすすみ，また深層から表層へと戻り，しかし概して周縁部から中心核へと突き進む。またその際，すべての停留所に寄らなければならない。それゆえ，これは桂馬とびパズルの解答が示すジグザグが，マス目模様を飛び越して移動するようなものである。
>
> この最後の喩えにもうしばらく拘りたい。この喩えではきちんと喩えられていなかったある一点を強調するためである。論理的連関は，ただジグザグ型に屈曲した線のみならず，むしろ分岐線に，特に集中線体系に相当する。そこには結び目があり，二つないし複数の糸がそこで出会い，そこからさらに統合された糸として出て行く。そしてふつうは核において，個々に独立して走っているか，脇道でところどころくっついた複数の糸が流れ込む。別の言い方をすれば，症状はしばしば何重にも既定されている，すなわち多重決定されているのであり，このことは極めて重要である[67]。

フロイトはこのようにして，ひとつの中心核を持ち，いくつもの思考の系列の接続，分岐によって広がる構造を示していた。この論理的配列は，フロイト自身が「力動的」と断っている

とおり，いわば，力の伝播がなされる際の回路図のようなものとして受け取っておくこともできるだろう。

しかしこの箇所において我々にさらに重要だと思われるのは，こうした迷宮状の配列が，「形態学的」配列と重ねあわされるとするフロイトの見立てである。この迷宮は，さらに別の二つの種類の「形態学的」配列と共存している。第一の配列をフロイトは，「線形的，時系列的」な「テーマ形成」の配列と呼んでいる[68]。この線的配列のうえに，さらに第二の配列が重なる。これは「病原的核の周りに同心円的に積み重ねられている。何がこの層を成すのか，この配列はどのような量の増減に従うのか，言うことはそれほど難しくない。これは，核に向かうにつれ増大する同一の抵抗が作る層なのである。またそれと同時に，これは同一の意識変化の領域であり，そのうちで個々のテーマは広がっている」[69]。

我々はこうして，迷宮状の論理配列と，その特性において異なる別の配列を，心的構成のうちで共存させる必要に迫られる。しかしこの二つは容易に重ねあわされそうにもない。一方は，中心から発する量的変化に基づく秩序であって，まさしくそのことにより，表面と深さとをひとつの距離として，そして意識の変化の程度として示している。他方の配列は，先に見たように，むしろ他方向性あるいは方向失調によって基礎付けられるのであり，表面と深層の移動を偏在的なものとする。ここに現れているのは，それ自体では必ずしも両立可能ではない二つの異なる構造化ではないだろうか。というのも，前者の構造化において含まれる時間的かつ空間的な形式性の解体したところに発見できるものこそ，後者の構造化なのだから。跳躍，退却，分岐，結び目のなかで，諸々の思考系列は無時間的につなぎあわされる。局所性は，エネルギー備給に（すなわち土地の境界が神経支配に）変換されるのだ。

しかしフロイトは『ヒステリー研究』において，つまり臨床においては，この二つの対立を重ね合わせた「三重の配列において」大量の記憶素材を「徹底作業」せねばならないとしている[70]。もし力動的な多重決定性と，形態学的な重層性がふたつの異なる原理に基づくものであるのならば，このような徹底作業はいかにして可能となるのだろうか。

ここで我々は，冥界の滞在者フロイトとは別のフロイトの姿を捉えねばならない。多重決定のフロイトに対する，重層性，地層性の擁護者フロイトである。力動性を局所性へと回収するフロイトであり，また，思想の多重決定性を，直線と弓状線とからなる堅い地層の形態に再組織化しようとするフロイトである。このフロイトを呼び出すために，ここで一八九六年一二月二六日付け，フリース宛の手紙を参照したい。そこでフロイトは「層」の概念を導入している。

> ご存知のとおり，僕の研究の仮定は，我々の精神機構は重層化 Aufeinanderschichtung により発生した，というものです。現存する記憶痕跡の素材が時折，新しい関連に応じた再配置 Umordnung を，つまり書き換え Umschrift を被ることで，精神機構は発生したのです。

ですから僕の理論の本質的な新しさは，ものを憶える Gedächtnis というのはひとつの層で為されるのではなく，多層的に存在しており，様々な種類の記号のうちに書き込まれているとする点です[71]。

この手紙の続く箇所で展開される重層性の図式化は，『夢解釈』第七章 b 節で示される心的装置の図を先取りしたものである。この層化でフロイトが描くのは，知覚から意識－前意識系へと向かうなかで，無意識の層が段階的に書き換えを被りつつ展開しているさまであった。まさしくこのことにより，前節で我々が見たような転移と反復は，直線上に組織化されることとなる。つまり，取りとめない跳躍は，知覚経験と意識のあいだの線的時間のうちでの漸進的過程として整理されるのだ。かくして記憶痕跡の再配置，書き換えは，古さと新しさの関係，原版とコピーの関係として成立することになるだろう。

こうした層化は，さらに「抑圧」に別のアプローチを与えることとなる。すなわち「翻訳の失敗」[72] である。ここでは抑圧は，層化における決定的断絶の瞬間を示すものとして，つまり決定的に何かを書き換え損ねる一段階として示される。しかし，このような抑圧の定義は，例の力動論的な見方とどのように重ねあわされるだろうか。というのも抑圧とは，ひとつの連続した表面として探索される思想配列のうちで作動する力の伝播と浸潤であった。こうした二つの見方は，それぞれに抑圧を異なる種類の否定性として提示することになるだろう。一方では，時空間の秩序のうちで書き換えにおける失敗としてネガティブに捉えられるいわば表象的否定性が問題となる。しかし他方では，表面上をかけめぐる力としてポジティブに捉えられる力能としての否定性を見なければならない。層化の図式と「翻訳の失敗」モデルは，その静的な階層性に留まるという点で，この後者の否定性を視界から消してしまいかねない。

実のところ後にフロイトが，一九一五年の論文「無意識」において「二重記載」の問題として取り上げたことは，ここでの整合性と関係していよう[73]。フロイト自身もまた，この二つの図式のあいだで決めかね，それを問いとして携えてきたのだ。一方で，層化という局所性の喩えは，表象の（前）意識系と無意識系の場所的な分断を想定しながら，両者への同時的な書きこみの存在を仮定している。これは，抑圧をあらかじめ分断された二つの場所間の移動として理解するものである。しかし，この仮定を扱いやすいものとみなしながらも，フロイトは，より蓋然性の高い仮定をも捨ててはいない。すなわち，抑圧を，ある表象におけるひとつの状態変化として扱おうとするものである。神経支配の理論とも関連付けられているこちらのほうを，我々は，いっそう力動論に立脚しようとする仮定とみなすことができよう。さて，フロイト自身はこの二つのあいだの選択を保留にしているが，同じ論文で新たに提示された概念は，むしろこの後者に対して何らかの理論的前進を与えようとするものとみなせるだろう。つまり「原抑圧」概念と，これを可能ならしめるものとしての「対抗備給 Gegenbesetzung」のそれであ

る[74]。フロイトはここで，前意識系から備給が撤収されるということだけでは，表象が無意識として維持される事態が記述できないことを鑑みて，通常観察される「本来の抑圧」に先立つ，無意識化の原初的契機，原モデルを設定するのである。またこうして，欠乏として描かれていたものに，肯定的な力の姿を与えるのだ。言うなれば，負量の導入により，不可視化の契機として働く否定性を，ひとつの力動的表出として肯定的に把握することが可能になるのである。

これが『夢解釈』から一五年後にフロイトが提示した解決であると思われる[75]。そしてそのときには，無意識系と前意識系の分断された二層それ自体が問題なのではなく，そのあいだの「境界」が舞台となることにも注目したい[76]。いわば「あいだ」を構成する表面的広がりのうちで，表象に加わる質的変化が取り上げられるのである。しかし一方で，この力動論的表面は，「原抑圧」という中心性への参照によって支えられていることにも注意しておきたい。ここで思い出しておけば，こうした中心核への参照は，実のところ『夢解釈』においても既にほのめかされていた。「抑圧」の原理に関して，その詳細な探究は棚上げされはしたが，「情動変化」の契機が取り上げられていたのだった。すなわち，幼児的願望の充足が快ではなく不快を生じせしめるような決定的変化をめぐる仮説である[77]。だが，この仮説は，その発達論的，歴史的な視野のなかで，先に確認したような多重的な絡まりからなるアポリアを，階層化された深層における起源の到達不能性へとずらすことにも役立ってしまうようだ。ここで我々は，純粋心理学的な力動論と，おそらくは臨床的な平面に属する歴史性の問題との軋轢に遭遇しているのかもしれない。ともかく，原抑圧の中心性と力動的表面との関係をめぐっては，階層化のモデルとは別のモデルを導入する必要があるだろう[78]。

いずれにせよ，ここで我々は，ふたつの異なるモデルがフロイトの心的配列において問題になることを確認した。地層として階層的に構造化される心的装置は，確かに，経験の時間的秩序を組み込むことにより，臨床の場を歴史化しつつ，起源へ向かう道のりを容易に可視化しうるかもしれない。しかし，そこでは否定的力の問題系が取り逃され，抑圧としては，単なる原版からの劣化のみが論じられるおそれが生まれよう。フロイトの思索においては，このふたつのモデルを行き来するゆらぎがある。最後に，我々は，こうした観点から再び，抑圧の分身たる「押さえ込み」について考察することとしたい。

5. 荒唐無稽を飼い慣らす

ここまで我々が『夢解釈』において注目してきたのは，そこに構成される思考の歩みの表面的で，網状，迷宮状の様態であった。フロイトはまさしくこうした回路のうえで，力の問いを扱おうとしていたのである。しかし他方で我々に気づかれつつあるのは，まったく別の特質を持つように思われる図式が，すなわち形態学的で局所論的な図式がここに介入し，表面的歩み

の分散的性質を層化し，階層化しながら，葛藤の形態を作り変えている，という事態である。ここで我々は，表面における道の通行禁止に比すべき抑圧-抵抗のモチーフが，いかにして，垂直的な「押さえ込み」として理解されるようになるのかを，『夢解釈』に戻って考えねばならないだろう。

さてこれにあたって，我々はただちに，フロイトが「押さえ込み」とあわせて語るもうひとつの重要なモチーフの検討に移りたい。すなわち「検閲」である。『ヒステリー研究』でフロイトは，抵抗を，自我が表象を拒絶する力であると説明するところで，その過程を「検閲」になぞらえている[79]。しかし，この「たとえ」は，既にいささか問題含みだ。というのも，それは，力が循環する道の交通の問題であるはずのものを，すべて高所により管理されたものとして記述しなおすことに関わるからだ。そして実際，『夢解釈』は，一方で，離散的に出現し，中心では暗闇のもとにもつれあっている思考の表面的接続を描きつつも，他方では，それら全てが予めひとつの目的によって支配されていることを，幾度となく主張するのである。そのとき「検閲」のモチーフが極めて重要な役割を果たしている。

フロイトにとって「検閲」とは何か。まずは彼がそれを，いささか強引な振る舞いで導入するところを見ておこう。夢を「歪曲 Entstellung」として，つまり偽装を通じて別の系列に転移されるものとして論じるところで，フロイトは次のように述べている。

> 願望充足が認識されず，偽装されているような場合，この願望に対する防衛傾向が存在しているはずだ。そしてこの防衛の結果において，願望はまさしく表現において歪曲されて現われる。私は，精神の内的生活から生じるこの出来事に対し，社会生活からの対応物を探そう。社会生活において，精神行為の似たような歪曲をどこで見出すだろうか。ただ，二人の人物の一方が権力を占有し，もうひとりのほうがこの力のために配慮を採用せねばならないときであろう[80]。

ここでフロイトは我々を説得するために，無意識を社会生活と対応させ，無意識メカニズムのうちに「権力」関係のイメージを導き入れている。検閲とはなにより，権力者が表現を「下に押さえ込む」こと，「弾圧すること unterdrücken」なのだ。上で見てきた議論が辿ってきたような抑圧概念に，フロイトはここで，なんの断りもなく，別種の力の形態を外側から追加しているのではないだろうか。表象秩序のうちの明暗の移動を司るような否定性が，いまや上からの権力行使として述語化されるのである。

この操作そのものについて，素朴な啓蒙主義理解はもっとも容易に説明を与えるだろう。つまり，「情動変化」の契機において，幼年期の開放的とみなされるような性が不快に転じるということを，社会的な規範作用と関連付ける仕方である。実のところ，フロイト自身と彼の注

釈者たちは，この素朴な啓蒙論を踏襲してきたのではないか，と見ることもできる。つまり，外にある父（ないし両親）の権威を取りこむことこそが，抑圧の決定的相関項であるとする理解である。この主題は，フロイト自身，良心や理想といった審級が心的装置にいかに組み込まれるかについて考えるたびに，実際に繰り返し検討してきたものであり[81]，一般にも，フロイトのエディプスコンプレクス論の根本要素として理解されている。しかし，精神分析の発明とエディプスコンプレクスの発見を密接に関連付けようとするこうした主張について，本論はここで，いくらか慎重な態度を取っておきたい。我々の主張を先に述べておけば，エディプスコンプレクスはそれ自体，普遍的原理の発見ではなく，むしろフロイトが発見した冥界的な論理をいわば統一したうえで，平定しようとする理論的野心に関わっている，とするものである[82]。しかし，まずは二つの基本的事実について確かめておきたい。

第一に，フロイトにおけるエディプスの参照は，概念として提示されているわけではなく，『夢解釈』における主要な主題をなしているわけでもない。ここでフロイトは，エディプス的状況を，後に定式化するような「中核コンプレクス」として導入しているわけではない。ましてや夢の欲望一般を，エディプス的欲望と等しくみなすような論述は決して行なっていない。エディプス的なものとは無関係に，夢の心理学は記述されうるのだ。第二に，以上を踏まえたうえでそれでも認めておかねばならないこととして，このときのフロイトにとり，死んだ父を問いとして引き受けることが，確実にひとつの大きなテーマをなしていたということが挙げられる。死んだ父と，それをめぐる自己の夢分析の過程が，確かに『ヒステリー研究』と『夢解釈』のあいだにあるもうひとつのテクストを成しているのだ[83]。

このあたりの事情について，ここでもう一度きちんと辿りなおしておくべきであろう。一八九六年一〇月二三日にフロイトの父ヤコブがこの世を去ったことは，フロイト自身に少なからぬ動揺を与えている。

> 公式な意識の裏の暗い道のどれかを通って，老父の死が僕を捕らえました。僕は父を尊敬していたし，よく理解していた。また父は，彼自身が併せ持つ深い知恵と空想的で軽やかな感性とで，多くのものごとを僕の人生に与えた。死んだときには彼はもう長く生ききっていましたer war lange ausgelebt。とはいえ内面にはこの機に昔のことすべてが蘇っています[84]。

八一歳の長寿を全うして亡くなった老人について「長く生ききった」と評す公式の喪の意識とは，別の道が開けたとフロイトは言うのだ。この道を通ってやってきた老父の死は，さっそく彼にひとつの夢（「片目をつぶる夢」）を見させ，それを解釈するように促している。以降，これを契機にフロイトが開始した自己分析は，九七年の夏から秋にかけて集中的に取り組まれた。

さて多くの論者は，この期間に誘惑理論からエディプス理論への移行が生じたのだと論じている[85]。簡単に確認しておこう。九七年二月八日の手紙でフロイトは自らの父を「倒錯者」であると断じていたが，先に見たとおり，この疑惑は，同年九月には，彼の神経症論とともに放棄されようとしていたのだった。他方でそれに平行して，自己分析はフロイトの生のさまざまな素材を再び蘇らせていた。子守女のこと，母親のこと，兄弟のこと。そうしたなか，九七年一〇月一五日の手紙においてフロイトは「普遍的な価値のある唯一の考え」を見つけたと伝える。すなわち「僕は自分にも母へのほれ込みと父への嫉妬を見出しました」[86]。こうして神経症者フロイトの父は，誘惑者から，敵対者に移るというわけである。フロイトはそこでエディプス王，さらにハムレットへと言及している。ただしこれは決してフロイトの自己分析の最終局面ではなかったし[87]，また彼自身，この着想を夢中で追いかけたというわけでもない[88]。それゆえこの敵対的父の発見を『夢解釈』の成立のうちにいかに位置づけるかという問いは，いまだ開いたままである。最終的に，『夢解釈』においてエディプスおよびハムレットが取り上げられる際にも，それは決して夢の一般的本性と結び付けられるような仕方においてではなかった。そこに見られるのは類型夢すなわち誰しもがよく見る夢から出発して，誰しもに共通の素地を指摘しようとする試みである。だが，そのこと自体は，決して『夢解釈』の議論すべてを支えるような足場として提示されたのではなかったのである。

そこで我々は，少し別の角度から，フロイトが父の死をいかに『夢解釈』のなかで扱ったか，検討してみることとしたい。そのために，人類の普遍的な基礎というのではない問題提起がなされている箇所に注目しておこう。そこは，フロイトが最も端的に，父子葛藤を取り上げた箇所である。そこでは，神話的な原点としてのそれではなく，むしろ近代市民社会が経験する歴史=社会的なズレとして，この葛藤が取り上げられている。

> 古代の家族で父が無制約の支配を奮うほど，有能な後継者である息子は敵の立場に移り，父自身が死に支配の座に着くのはいつかといらだちを募らせたに違いない。我々の市民的家族においてなお，父は自己決定 Selbstbestimmung とそれに必要な手段を認めないことで，この関係にもともとある敵意の芽を息子が膨らませる機会を与えることがよくある。医者がしばしば気づくことに，父を失ったことの辛さは，息子においては，ついに獲得した自由の満足感を押さえ込む unterdrücken ことはできない。我々の今日の社会ではすっかり骨董品となった〈家長権〉の名残に，どの父もひきつったように krampfhaft しがみついているものだ[89]。

この一節でフロイトは古代ローマとの重ね合わせを通じ，近代市民社会における父が，父性的権威という遺物，骨董品，名残にしがみつく，ひきつった姿勢を描き出している。父の死に

たいして抱かれるべき辛さと，「押さえ込め」ない息子の自由とを天秤にかけるフロイトの筆には，ショウスキーの古典的著作が示したように，四八年革命後のオーストリアの政治的リベラリズムの空気のもとで学問的解放の道を歩んだ彼の人生を透かし見ることができる[90]。ここで改めて強調しておけば，この齟齬は，近代市民社会が可能とした自由な主体と，時代錯誤的な父性的権威とのあいだに存在する。すなわち自由な主体が面と向かうものとしての畏れるべき父性とは，時期をわきまえず遅れてやってくるものなのだ。

しかし同時に，当時のフロイトにとって父とはまた別の意味で，近代市民社会の外側にあるものとしての意義を持っていた。九六年七月一五日付けのフリースへの手紙を見てみよう。そこでフロイトは，老父の介護を，彼自身の「ゾーンポリティコン」，すなわち市民生活と秤にかけている[91]。先に「長く生きた」と生を過去形で示されていた老父は，まさしくそれにより，都市の生とは別の生を生きるものとなり，市民フロイトにのしかかる。しかし，それはここでは，権威の遺産にしがみつくひきつった姿においてではなく，むしろ哀れむべき姿をとるであろう。

従って問題は，近代市民社会の外にあるものとしての父である。フロイトの自由を「押さえ込み」かねない，恐るべき，また哀れむべき存在としての父である。「都市の生」の場にひきつりながら追いつこうとしつつ，また行き過ぎてしまう，そのような外としての父を，フロイトは相手にしている。そのような父こそが，あの「公式の意識の裏の暗い道」を通り，フロイトを捉えたのに他ならない。これは幼年期において克服すべき，あるいは従うべき現実的敵対者というよりは，むしろ今この場において思考の舞台を挟み撃ちに制限する特異な情動の担い手として呼び出される者なのである。

『夢解釈』においては，いわば，この特異な情動が，力の表面的次元を貫通しつつ組織化するひとつの潜在的な道を成している。この著作においてきわめて徴候的な節である第六章 f 節「荒唐無稽な夢」へと，ここで目を向けたい。フロイトは，この節に，「一見，偶然に」であるかのように死んだ父にまつわる夢を集めている[92]。しかしもちろん，それは偶然ではない。フロイトはこう説明する。

> 夢の荒唐無稽 Absurdität の例として何よりこうした死んだ父についての夢が提供されたことはまったく偶然ではない。ここには荒唐無稽な夢の創造の条件が典型的な仕方でまとまっている。父に固有の権威は，早くに子どもの批判を呼び起こした。さらに父が出す厳しい要求のせいで，子どもは，自分の安堵のために，父の弱みのことごとくに鋭い注意を向けるようになった。しかし，父の人柄は，特にその死後，我々の思考のうちで畏敬 Pietät をまとうようになり，この畏敬が検閲をより鋭くする。そうしてそのために，この批判の表現は意識から追い出される abdrängen のだ[93]。

この直前の箇所でフロイトは，荒唐無稽の説明として，「夢作業が矛盾を描写するための手段のひとつ」であるとしている。すなわち，ここでは矛盾や無意味は，描写の破綻という形式的側面に関係しているのみならず，描写の内容，その質量そのものとなっている。それゆえ，上記の引用は以下のように理解されるだろう。幼年期において敵対者となった父に対する批判の気持ちは，死後に高まった父への「畏敬」のために追い出される。そのとき夢はまさしく，この批判の追い出しが生み出す表現の方法としての「荒唐無稽」を通じて，批判それ自体を表現するようになる，というわけである。

さてこの「畏敬」とは，まさしく近代市民社会の中で外に置かれたあの二つの情動，すなわち畏れと哀れみの複合ではないだろうか。自由なる主体の公的意識と相反するこの情動こそが，ここでは検閲の鋭さとして現れ，批判的表現としての「荒唐無稽」を，夢のうちに持ち来たらすのだ，とフロイトは述べるのだ。自由は，そこでは必ず異議申し立てとしてみなされねばならない，とフロイトは信じているかのようである。こうして，ちぐはぐさという事物状態である荒唐無稽は，畏敬を通じて，「荒唐無稽」という出来事になる。無秩序が，畏敬を通じて，反秩序へと組織化されるのだ。我々はまさしくこの過程に，『夢解釈』において行なわれた垂直的総合の介入を見ることができるだろう。力の離散の場である表面的冥界は，外部の標識によって裏打ちされることにより，対抗的実質として組織化される。このとき，ちぐはぐに分散する荒唐無稽の小道は，そのものとしては捉えられない。畏敬により通行不能となった批判の大道という潜在的な線との関係のもとで，バイパスへと格下げされて現れる。表面は，深層への逗留から切り離される。容易に越えがたい距離のもとで，皮相なもの，上っ面のものとしての位置を受け取ることになる。ここでフロイトによる最終章の議論を確認しておこう。

> 目標表象の放棄ではなく，検閲の圧迫が，表面的連想の優位にとっての正当な根拠である。表面的連想は，検閲がこの正常な結合の道 Verbindungswege を通行不能にしているときに，深層的連想の代役をつとめる。それはちょうど，一般的交通障害物，たとえば洪水が，山において，大きくて幅の広い道を通行困難 unwegsam にしているときのようなものである。交通はそのとき，ふだんは猟師しか使っていなかった快適でない険しい小道 Fusspfaden において維持される[94]。

ここでもフロイトは，表面をそのものとしては捉えない，という立場をとる。表面的連想が支配的になることは，それが目標表象のない本来的無秩序へと開かれたためではないというのだ。彼にとり，それは検閲の圧迫によるものでなければならない。言い換えれば，表面的連想には，かならず検閲と裏腹の，ひとつの隠された目標表象への道が存在していなければならない。事実，フロイトは，器質性疾患を例外としながら，正常な思考であれ，精神神経症であれ，

さらには精神病性の妄想でさえ，そこにはひとつの目標表象があるのだとしている。しかし，それは何であろうか。ここで，フロイトは，思弁的奔放を離れ，ひとつの社会的条件のなかへと自らの理論を着地させようとする。つまり「治療という目標表象」であり，またさらに「ひととしての私」，フロイト本人という目標表象である[95]。我々がよく知る転移概念への準備がここに整うのだと言ってよいだろう。転移に関する理論的展開を追うことは別所に譲るが，ここでは転移神経症論において，フロイトがまさしく同じ振る舞いで治療空間を構造化していたことを思い出しておこう。すなわち，そのときに問題であったのは，いくつもの抵抗，いくつもの葛藤を，たったひとつの抵抗，葛藤，すなわち医者-患者のあいだの闘争へと作りこむことであった[96]。

かくしてフロイトにおいては，『夢解釈』全体を，外を指し示す大道としての「畏敬」の情動が貫くのである。あるいはそのようにしてフロイトは，思想の表面的な論理連関の新たな局所性を決定しようとするのである。思想の運動が変質する。表面は，冥界へ深く降るものとしてではなく，そこから切り離された皮相性として規定される。同時に冥界そのものもまた，そうして浮かぶ皮相性に隠されるような地下世界となる。奔放な荒唐無稽は批判的な荒唐無稽となり，力のせめぎ合いとしての「抑圧」は，弾圧としての「押さえ込み」として理解されるようになる。ディドーの情念と共鳴するものとしての『夢解釈』の執筆は，このとき，「王道」を敷設する建国の英雄の物語へと転ずるだろう。フロイトは，いまや無軌道な戦乱の神の側にいるのではない。異教的戦乱と帝国的平定のあいだの根本的葛藤を生きる主人公アエネーアースの側にいるのだ。その意味で，一九〇九年に『夢解釈』の第三版で，ユノーの台詞の後にフロイトが加えた一文，「しかし夢解釈は心的生活における無意識の知識に通ずる王道である」には，哲学者フロイトの臨床家への回帰を見るべきだろう。冥界はかくして鎮められる。フロイトは既に，トネリコの枝を折りながら，冥界への道へ分け入り，父性を確認して地上へと舞い戻る。ディディエ・アンジューが主張するように，『アエネーイス』を読みつつ，フロイトは父の死を思いながら，ある種の喪の作業として，『夢解釈』という冥界くだりを挙行した，そのようにも言えるだろう[97]。

しかし，我々がこれまでたどってきた考察は，それでもなお，始まりのフロイトのうちに，あの不穏にして異教的なディドーの姿を認める余地を与えてくれたのではないだろうか。「王道」を行くフロイトのわきに，ある意味で未完のままに留まり続ける哲学者フロイトの存在が示唆されていなかったろうか。すなわち，荒唐無稽の力動論への可能性を開く，深層の徒歩巡礼者フロイトである。精神分析帝国の建国の祖である以前に，自らを異教徒の女王の立場に置きつつ葛藤の理論を編んだフロイトである。

本論は，しばしば忘れられがちなこのフロイトに近づくための読解の試みであった。実のところ，こうした冥界への滞留を促す呼び声が，フロイトの精神分析帝国のエディプス的な成功

の影に，つねに暗い予感としてつきまとっているようにすら思われる。『夢解釈』執筆の後も，確かにフロイトは暗闇のうちを彷徨っている。父の言葉を確認して地上へ翻るよりも，層化の果てを見極めて，冥界の核へたどり着くようにと，フロイトは誘われている。

大きな問題に関してはまだ何もはっきりしていることはない。すべては波のように揺らぎ，うす明かりのうちに兆している。知の地獄。層が幾重にも。もっとも冥いその核にルシファー=アモルの影が見える[98]。

フロイトの冥界くだりの続きを，我々は別の機会に再開する必要があるだろう。

注

1） S. Freud, *Briefe an Wilhelm Fliess*, Herausgegeben von Jeffrez Moussaieff Masson, Bearbeitung der deutschen Fassung von Michael Schröter, Transkription von Gerhard Fichtner, S. Fischer, 1985, S. 458.（邦訳『フロイト　フリースへの手紙 ―― 1887-1904』J. M. マッソン，M. シュレーター編，河田晃訳，誠信書房，二〇〇一年，四四五頁）。問題の夢とは，『夢解釈』でイルマの夢として紹介されているもの。

2） 一八九六年三月一六日の手紙。*Ibid*., S. 188.（同上，一八三頁）

3） 一九九六年四月二六日の手紙。*Ibid*., S. 193.（同上，一八八頁）

4） Ibid., S. 283.（同上，二七四頁）

5） Ibid.（同上）

6） 一八九七年六月二二日の手紙。*Ibid*., S. 271.（同上，二六三頁）。この前の箇所でフロイトはアウスーゼの森のことをのべている。

7） 一八九七年八月一四日の手紙。*Ibid*., S. 280.（同上，二七二頁）。

8） 一八九七年八月一四日の手紙。*Ibid*., S. 280.（同上，二七二頁）。

9） *Ibid*., S. 286.（同上，二七六頁）．強調は引用者による。

10） Freud, S., *Jugendbriefe an Eduard Silberstein 1871-1881*, S. Fischer, 1989, S. 115. 一九世紀の文脈で言うならば，ここで哲学と呼ばれるもののうちには，こんにちから見た心理学的な議論を含んでいる。フロイトは大学時代にはフランツ・ブレンターノの授業に足を運んでいたことが知られている。

11） フロイトの「隠れ生物学者」としての側面については，サロウェイの浩瀚な研究を参照のこと。F. J. Salloway, Freud, *Biologist of the mind*, Basics Books, 1979.

12） *Ibid*., S. 328.（同上，三一八頁）

13） *Ibid*., S. 386.（同上，三七五頁）

14） *Ibid*., S. 396.（同上，三八四頁）

15） 九六年一二月四日の手紙。*Ibid*., S. 216.（同上，二一〇頁）

16） ウェルギリウス『アエネーイス』上・下，泉井久之助訳，岩波文庫，一九七六年．またディドーの復讐という主題は，ローマ対カルタゴの対立という歴史的文脈と関係するが，さらにフロ

イトの時代には，これがキリスト教会とセム族ユダヤ人との対立に重ねられていた。この点を証言するテクストとして以下を参照のこと。Freud, “S. Zur Psychopathologie des Alltagslebens”, *Gesammelte Werke IV*, S. Ficher, 1941, S. 15-20.（「日常生活の精神病理学に向けて」高田珠樹訳，『フロイト全集』7，岩波書店，二〇〇七年，一五-二〇頁）．Gesammelte Werke については以下 G. W. と略し，ローマ数字で巻数を併記する。

17） *Ibid*., S. 285-6.（二七六頁）強調引用者。バルマリは，この小話について，フロイトの家族史における秘密の人名「レベッカ」（フロイトの父ヤコブの前妻の名か）と関連付けた考察を行っている。M. バルマリ『彫像の男』岩崎浩訳，哲学書房，一九八八年。

18） S. Freud, *Traumdeutung*, Franz Deutike, 1900, S. 351. 以下『夢解釈』の翻訳は初版に基づき筆者が訳した。読解に際しては以下の既邦訳を参考にしたことを記す。フロイト『夢解釈〈初版〉』上・下，金関猛訳，中公公論新社，二〇一二年．および『フロイト全集』4・5，新宮一成訳，岩網書店，二〇〇七，二〇一一年.

19） *Ibid*.

20） *Ibid*., S. 352.

21） *Ibid*., 1900, S. 354-5.

22） *Ibid*., S. 355. 強調は原文。

23） *Ibid*., S. 360.

24） S. Freud, *Briefe an Wilhelm Fliess*, op. cit., S. 331（上掲書，三二一頁）．また以下では最初の構想と出版されたものの比較が確認できる。D. Anzieu, *L’Auto-analyse de Freud et la découverte de la psychanalyse,* PUF, 1959, p. 208.

25） *Traumadeutung*, S. 361.

26） *Ibid*., S. 362. 後の第二版（一九〇九年）では，『アエネーイス』からの引用のあとに以下の有名な一節がさしはさまれる。「しかし夢解釈は，心的生活における無意識の知識に通ずる王道 Via regia である」（G. W. II/III, S. 613（『フロイト全集』5，四一二頁））。この振る舞いの意味については後に再び取り上げよう。

27） そうした見方の代表として，たとえばフロイトの同時代人ピエール・ジャネの名を挙げることができるだろう。ジャネとフロイトの差異については以下の拙論を参照されたい。上尾真道「心理的窮乏 ―― Janet の精神療法の射程をめぐって ――」『精神医学史研究』，精神医学史学会，第 17 巻第 1 号，pp. 16-21，2013 年.

28） ここで，問題の銘そのものがフロイトに知られたのが，十九世紀の社会主義者フェルディナンド・ラッサールのパンフレット『イタリア戦争とプロイセンの責務』によってであることを思い出すなら，フロイトのこの振る舞いを，より広い社会的文脈に位置付ける手がかりとなろう。フロイト自身は随分のちにではあるが，一九二七年一月三〇日付のヴェルナー・アケリスへの手紙でこの点に触れている。「僕はこの引用をラッサールから借りました。ラッサールの引用にはラッサールなりの意味があり，この引用が関係づけられていたのは，心理的層化ではなく，社会的層化でしたが」。S, Freud, « L’interprétation du rêve », *Œuvres complètes IV 1899-1900*, P. U. F., 2003, p. 663, note a. さらに，フロイトがラッサールから受けえた影響について考察したものとしては以下を参照のこと。C. E. ショースキー「フロイトの『夢判断』における政治と父殺し」『世紀末ウィーン』安井琢磨訳，岩波書店，一九八三年.

29） たとえばエレンベルガーによるフロイトの「力動」論の理解は，催眠・ジャネ・ブロイラーとの連続性のなかでそれを捉えつつ，いわゆる「深層心理学」に落とし込もうとするものである。

以下を参照。エレンベルガー『無意識の発見』下，木村敏・中井久夫監訳，弘文堂，一九八〇年，九一-九二頁.

30）　*Traumdeutung,* S. 111

31）　*Ibid,* S. 361.

32）　J. Laplanche et J. -B. Pontalis, *Vocabulaire de la psychanalyse*, PUF, 1967, p. 419.（『精神分析用語辞典』村上仁監訳，みすず書房，一九七七年，九一頁）．またもうひとつの重要な用法として，彼らは「押さえ込み」が情動に関して使われるケースを指摘している。

33）『夢解釈』の一九六九年の新潮社文庫版の訳者高橋義孝は，verdrängen の訳として「追放」，「放逐」のほうがふさわしいだろうとの指摘をしている。フロイト『夢判断』（下），高橋義孝訳，新潮社，一九六九年，三七九-三八〇頁。「抑圧」なる訳語が（ある種の誤解とともに）幅を利かせてきた理由としては，英語圏での“repression”概念との合流という点から歴史的に検討することも可能であろう。

34）　以下『ヒステリー研究』に関しては，以下の初版を参照する。J. Breuer und S. Freud, *Studien über Hysterie*, Franz Deuticke, 1895（ブロイアー／フロイト『ヒステリー研究〈初版〉』金関猛訳，中央公論新社，二〇一三年）．

35）　H. Oppenheim, *Die traumatischen Neurosis nach den in der Nervenklinik der Charité in der letzten 5 Jahren gesammelten Beobachtungen*, August Hirschwald, 1989.

36）　以上の経緯については以下を参照。そこでは，外傷神経症に関心をもったフロイトが，1886年にオッペンハイムと会うことを画策していることも紹介されている。G. Tréhel, “Karl Abraham（1877-1925）et Hermann Oppenheim（1857-1919）: rencontre autour des névroses traumatiques de paix”, *L'Information psychiatrique*, 81, 2005, pp. 811-22. ちなみにオッペンハイムは，フロイトの高弟カール・アブラハムの縁戚にあたり，ブルクヘルツリからベルリンへ戻ったばかりのアブラハムの世話をしばらくのあいだ見ていた。そのすぐ後，オッペンハイムはむしろ熱心な精神分析反対派へとまわることになる。

37）　*Studien über Hysterie*, S. 8（上掲書，一四頁）．

38）　*Ibid*., S. 13（同上，二三頁）．

39）　S. Freud, “Zur Ätiologie der Hysterie“, *G. W. I*, S. 428（「ヒステリーの病因論のために」芝伸太郎訳『フロイト全集』3，岩波書店，二〇一〇年，二二二-二二三頁）．

40）　*Studien über Hysterie*, S. 7-8（上掲書，一二-一四頁）．

41）　*Ibid*., S. 234（同上，四二一頁）．

42）　*Ibid*.（同上）

43）『あるヒステリー分析の断片』（ドラ症例）の脚注で以下のようにはっきりと表明されている。「私は，ヒステリー性症状形成における心的過程の本質たる，諸問題の連続性を，こうした命名〔引用者：ブロイラーの「類催眠状態」〕により分断することは，余計な混乱のもとだと考える」。Fured, S. “Bruchstück einer Hzsterie-Analyse“, *G. W. V*, S. 185.（「あるヒステリー分析の断片」渡邉俊之・草野シュワルツ美穂子訳『フロイト全集』6，岩波書店，二〇〇九年，二九頁）．

44）「下意識」は一八八〇年代の催眠・ヒステリー研究で使用された術語であり，いわゆる夢遊状態での行動がこれによって記述された。その後は，ピエール・ジャネによる使用に大きな影響を受け，異常心理学・精神病理学の基本概念として流布していく。ジャネは「下意識」として，意識統合の「解体」を通じて作り出されるような変性意識について語っている。例えばジャネが下意識的固定観念について述べる以下の記述を，本文におけるフロイトをめぐる議論と比較するこ

と。「そうした〔下意識的固定〕観念の力は孤立に依拠している。この観念は広がっていき，寄生虫のように精神に居つくのだが，主体はこれを知らない。また最初の思考の流れから分断された二つ目の思考の流れに隔離されているため，主体はそれら観念を止めることはできない」。P. Janet, « Psychoanalysis », *The Journal of Abnormal Psychology*, Vol. IX, 1914-15, p. 24.

45） *Studien über Hysterie,* S. 255（同上，四五八頁）.

46） *Ibid*（同情）．強調は引用者による。

47） *Traumdeutung*, S. 363　強調は引用者による。

48） *Ibid*., S. 315.

49） S. Freud, “Die Frage der Laienanalyse”, *G. W. XIV*, S. 221（「素人分析の問題」石田雄一・加藤敏訳『フロイト全集』19，岩波書店，一一八頁）.

50） S. Freud, S. “Das Unbewusste”, *G. W. X*, S. 272（「無意識」新宮一成訳『フロイト全集』14，岩波書店，二二一頁）．ブロイラーの元テクストは以下。Bleurer, *Die Psychanalyse Freuds : Verteidigung und kritische Bemerkungen*, Franz Deuticke, 1911, S. 3. さらに以下の箇所でフロイトがこの用語に対し示す距離も見よ。S. Freud, “Zur geschichte der psychoanalytischen Bewegung”, *G. W. X*, S. 82-83（「精神分析運動の歴史のために」福田覚訳『フロイト全集』13，岩波書店，二〇一〇年，八三-四頁）.

51） たとえば，外国で発表された，諸学との関係を論じつつ精神分析を紹介するテクストである。S. Freud, “Das Interesse an der Psychoanalyse”, *G. W. VIII*, S. 398（「精神分析への関心」福田覚訳『フロイト全集』13，二一一頁）．また S. Freud, “Soll die Psychoanalyse an den Universitäten gelehrt werden”, *G. W. Nb*, S. 702（「精神分析は大学で教えるべきか」家高洋訳『フロイト全集』一四，一〇七頁）.

52） S. Freud, “Das Interesse an der Psychoanalyse”, *ibid*.（同上）

53） 確かにフロイトはしばしば深層を，そうした探求の目的地として描いてもいることを付け加えておく。以下を参照。S. Freud, “Aus der Geschichte einer infantile Neurose”, *G. W. XII*, S. 32（「ある幼児期神経症の病歴より」『フロイト全集』14，岩波書店，六頁）.

54） S. Freud, “Zur Geschichte der psychoanalytixchen Bewegung”, *G. W. X*, S. 113（上掲書，一一四頁）.

55） S. Freud, „Erinnern, Wiederholen und Durcharbeiten“, *G. W. X*, S. 127（「想起，反復，反芻処理」道籏泰三訳『フロイト全集』13，岩波書店，二〇一〇年，二九五-六頁）.

56） Starobinski, J., “Acheronta Movebo : Nachdenken über das Motto der „Traumdeutung““, *Hundert Jahre Traumdeutung“ von Sigmund Freud*, Fischer, 2000. スタロバンスキのこの著作は問題の銘の検討として先駆的かつ重要なものである。スタロバンスキは，フロイトの歩みを，ある種の征服者の力強い歩みとみなしている。我々が強調するのは，むしろ再び暗闇に下っていくための足取りである。この差異は後に取り上げる。

57） 一八九九年八月六日の手紙。S. Freud, *Briefe an Wilhelm Fliess*, S. 400.（上掲書，三八九頁）また『夢解釈』第三章の冒頭も参照せよ。

58） *Traumdeutung*, S. 298-9.

59） *Ibid*., S. 299. 実際，フロイトの理論においてひとつの展開点となるいくつかの論文（「ナルシシズムの導入」や「快原理の彼岸」）では，まさしくこうした方針が採用される。つまりさまざまな攻撃地点から，それぞれに問題の核心へ向けてとりあえずいけるところまで突き進むというスタイルである。

60）　以下も参照せよ。*Studien über Hysterie*, S. 259（上掲書，四六四–四六六頁）.

61）　*Traumdeutung*, S. 308.

62）　*Ibid*., S. 306.

63）　*Ibid*., S. 307.

64）　*Ibid*., S. 306.

65）　S. Freud, “Die endliche und die unendliche Analyse”, *G. W. XVI*, S. 99（「終わりのある分析と終りのない分析」渡邉俊之訳『フロイト全集 21』，二九四頁）。ただし，この「岩盤」は，去勢と結び付けられることが通例となっているように思われるが，実際は正しく「女性性の拒否」の問題と関連付けられるべきである。

66）　この点に関してはS. ウェーバーの議論を参照せよ。彼は，こうした夢のへその特徴を，開口部をふさぐラカンの「ファルスの意味作用」（聳え立つキノコが示唆するような）に対置して，根を持たぬ「葉状態 thallus の意味作用」として論じている。S. ウェーバー『フロイトの伝説』前田悠希訳，法政大学出版者，二〇〇九年，一〇三–一三一頁．ところでフロイトはキノコ取りの名人であった。

67）　*Studien über Hysterie*, S. 254（上掲書，四五六–七頁）．強調は引用者による。

68）　*Ibid*., S. 253（同上，四五五頁）.

69）　*Ibid*., S. 254（同上，四五五–六頁）.

70）　*Ibid*., S. 253（上掲書，四五四頁）.

71）　S. Freud, *Briefe an Wilhelm Fliess*, , S. 217.（上掲書，二一一頁）本節での議論に関して，石澤の議論も参照のこと。彼は以下で『ヒステリー研究』と「手紙」に見られる心的装置の議論を，それぞれ全く異なる「喩え」であるとしつつも，そのあいだには「書かれること」という同じ主題が通底するとしている。石澤誠一『翻訳としての人間』，平凡社，一九九六年，四七頁.

72）　Ibid（同上）.

73）　S. Freud, “Das Unbewusst”, *G. W. X*, S. 270–275（『フロイト全集』14，二一八–二二四頁）.

74）　*Ibid*., S. 280（『フロイト全集』14，二二九頁）.

75）　このテーマに関してフロイトが行った根本的な考察は，いわゆる「科学的心理学草稿」のうちにすでに認められると言っても良いかもしれない。S. Freud, “Entwurf einer Psychologie,” *G. W. Nb*（「心理学草案」総田純次訳『フロイト全集』3，岩波書店，二〇一〇年）。一八九五年にすでに執筆されていたこの草稿では，知られているように，ニューロンによる刺激量の処理の様態を仮定することで，力動的プロセスとして，心的装置の局所性を説明し尽くそうと試みたものである。しかし細かな検討は，少なくともさらに一節かそれ以上を要するものであり，別の機会に譲らねばならない。

76）　S. Freud, “Das Unbewusst”, S. 279（同上，二二八頁）.

77）　*Traumdeutung*, S. 359.

78）　ここで我々に思い浮かぶのは，まさしく同じ時期にアインシュタインが発表した一般相対性理論において，重力場を図示するために採用されたモデルである。

79）　*Studien über Hysterie*, S. 235（上掲書，四二二頁）.

80）　*Traumdeutung*, S. 99.

81）　例えば以下の箇所を参照。「良心がその見張り役として定められている自我理想の形成を促す力は，もとはといえば，声によって媒介された両親の批判的な影響力に由来していた」。S. Freud, “Zur Einführung des Narzißmus”, *G. W. X*, S. 163（「ナルシシズムの導入に向けて」立木

康介訳，『フロイト全集』13，一四四頁）.

82） 私見ではフロイトがエディプスコンプレクスを本格的に理論の中心に据えようとするのは第一次大戦後のことであると思われるが，詳論は別所に譲る。ここでは同様の観点から『性理論三篇』の初期の版と後期の版の比較を行なっている以下の論文を参照のこと。Ph. Van Haute, “The introduction of the Oedipus Complex and the reinvention of instinct : Freud’s Three Essays on the Theory of Sexuality”, *Radical Philosophy*, 115, September/October 2002, pp. 7–15. ファン・ホートはここで幼児と成人の性の根本的葛藤という論点が，後期のエディプスコンプレクスの導入により発達論的に解消されているとの見方を示している。

83） 一九〇九年に付け加えた『夢解釈』第二版の緒言でフロイトはこの点を認めている。ただしこの緒言は一九一四年の三版で削除された。S. Freud, “Die Traumdeutung”, *G. W. II/III*, S. X（『フロイト全集』4，七頁）.

84） 一八九六年一一月二日の手紙。S. Freud, *Briefe an Wilhelm Fliess*, S. 213（上掲書，二〇七頁）. ここでの「生きた」を，『夢解釈』における「生きなかった non vixit」の夢との関連で理解すべきかもしれない。

85） 代表的なものとして以下を参照せよ。M. クリュル『フロイトとその父』水野節夫・山下公子訳，思索社，一九九七年。

86） S. Freud, *Briefe an Wilhelm Fliess*, S. 293.（上掲書，二八四頁）.

87） 九七年一一月一四日の手紙。*Ibid.*, S. 305（同上，二九四頁）. ここでは自己分析の不可能性も述べられている。

88） 九八年三月一五日の手紙。ここでフロイトは，エディプス伝説についてまだ調べていないと述べている。*Ibid.*, S. 332（同上，三二一頁）.

89） *Traumdeutung*, S. 177.

90） ショウスキーは世紀末ウィーンの政治的空気のうちにフロイトを位置づけつつ，『夢解釈』の背景の見事な分析を行なっている。C. E. ショースキー，上掲書.

91） S. Freud, *Briefe an Wilhelm Fliess*, S. 205（上掲書，一九九頁）.

92） *Traumdeutung*, S. 245.

93） *Ibid.*, S. 250.

94） *Ibid.*, S. 310–11.

95） *Ibid.*, S. 311.

96） S. Freud, “Zur Dynamik der Übertragung“, *G. W. VIII*, S. 364–74（「転移の力動論に向けて」須藤訓任訳『フロイト全集』12，二〇九–二二〇頁）.

97） D. Anzieu, *op. cit.*, p. 95. ちなみにアンジューがフロイトの『アエネーアース』からの引用に見た教訓は以下のようなものであった。「教訓は明らかだ。内面の地獄に降りるものは何人も，暗闇の力を「活気付かせ」ずにはいない。その危険のうえで，フロイトはいわゆる自らの自己分析を開始するのだ」。*Ibid.*, p. 97.

98） 一九〇〇年七月一〇日のフリース宛書簡。S. Freud, *Briefe an Wilhelm Fliess* S. 436（上掲書，四五〇頁）.

要　旨

本論は，フロイトの代表的著作である『夢解釈』の冒頭にかかげられた銘，「天上の神々を説き伏せられぬのなら，冥界を動かさん」から出発して，精神分析の始まりを印すフロイト思想に新たな光を投げかける試みである。

第一節では，『夢解釈』が出版される一八九九年以前のフロイトに着目しつつ，この著作の執筆が，神経症論の著作の断念によって可能となったものであることを確認する。またそこでは，上記の銘の由来であるヴェルギリウスの『アエネーイス』を参照しながら，『夢解釈』の執筆が，この断念に対する一種の復讐であり，一般的神経症論の転覆を企図するものであったことを確かめる。そこにおいて我々は，正常と異常のあいだの分断を撹乱し，これに代えて諸葛藤の平面の理論を構築しようとするフロイトの姿を認めることとなる。

続く第二節では，このようなフロイトの姿を『ヒステリー研究』における抑圧理論との関連から吟味する。そこでは連続的な表面のうえを伝播する力としての抑圧概念の意義が確認される。さらに第三節では，『夢解釈』におけるフロイト独自の叙述スタイルが，臨床的な夢解釈のスタイルと平行的であることを論じ，その特徴としての多重性について明らかにする。

第四節においては，上記のような視座を反映するものとして，迷宮状の心的構成を描き出す『ヒステリー研究』の一節を検討するとともに，同時にそれとは異なる理論化の方向性との関係を見る。この後者とは，心的構成を階層化によって整理しようとするものであり，力の伝播の問題を垂直的な分断性に変換するものと考えられた。

最後に第五節では，この後者の理論化の方向性を，『夢解釈』の背景でフロイトが取り組んだ父性の問いとの関連で考察する。そこでは父への「畏敬」との関連のもとで，夢の荒唐無稽性が，諸葛藤の平面としてではなく，地下性として上層に対立するようになることを確認した。こうして本論はフロイトが，深層を理論化するにあたり二重の立場のあいだで揺らぎつつ，思考していることを明らかにした。

キーワード：フロイト，『夢解釈』，抑圧，深層，多重決定

Abstract

This paper will try to shed a new light onto Freud's thoughts that mark the birth of psychoanalysis, by rethinking the epigram of his *The Interpretation of Dreams*, *Lectere si nequeo superos, acheronta movebo*.

In the first section, it will be argued that Freud's renouncement to write a book on the topic of neurosis allowed him to engage in another project, a philosophical work about dreams. According to the original context of the epigram, Virgil's *Aeneid*, this book could be thought of as revenge as well as a subversion of general neurological discourse of that era. Here we can find Freud disrupting the division between normality and abnormality, and constituting a surface of plural conflicts.

In the second section we reconsider the notion of "repression" in his *Studies on Hysteria*, in order to clarify the significance of this notion as a force circulating on the continuous surface. In the third section, we take a closer look to Freud's discursive style in *The Interpretation of Dreams*, which would be parallel to that of clinical procedure of interpretation of dreams, featured by overdetermination.

In the fourth section, we examine several passages from *Studies on Hysteria* illustrating psychical arrangement like labyrinth, as well as another type of organization considered opposed to the former.

Finally, in the fifth section we consider the problem of paternity in order to see how it would make it possible to reorganize the absurdity of dreams as undergroundness. We will thus find two alternating figures of Freud theorizing "the depth".

Keywords : Freud, *The Interpretaion of dreams*, repression, the depth, overdetermination